病害虫診断のポイントと防除対策　No.48

ナシのニセナシサビダニ

1　形　態

成虫の体色はクリーム色。体長は約 0.2mm の極めて微小なダニで、うじ虫型をしており脚は2対です。 肉眼で観察することはほぼ不可能で、葉に被害が生じてから本種の発生に気がつくことが多いです。

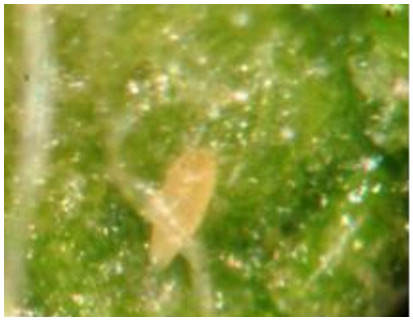

写真1　成虫

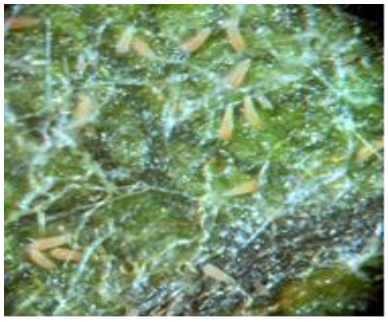

写真2　成虫、幼虫の集団

2　被害の様子

本種はナシのみに寄生し、徒長枝先端の柔らかい新葉を吸汁加害するとともに、被害葉はさび症状を引き起こされ、変形、褐変し、早期に落葉します。また、近年では、葉にモザイク症状を引き起こすことも確認されました。

写真3　さび症状となり変形落葉する。

写真4　葉が湾曲しモザイク状となる。

写真5　モザイク症状

3　発生について

（1）ナシ新葉表面の毛の中に寄生するので、被害は徒長枝の先端に発生しやすいのが特徴です。

（2）多くの品種に寄生しますが、被害は品種によって異なり、新葉に表面の毛が多い「あきづき」では寄生が多く、被害も大きくなります。

（3）成虫で越冬します。越冬場所は芽の基部や枝の粗皮、枝の古い切り口等、ナシ樹の様々な間隙です。越冬後、成虫は5月頃から発生し、6月～7月に発生盛期を迎えます。25℃条件下では5日間で卵から成虫になり、 8月～9月には越冬場所へ移動します。

4　ニセナシサビダニとチャノキイロアザミウマ被害の見分け方

本種の被害とチャノキイロアザミウマによる被害は、ともに葉裏に発生し症状がよく似ています。寄生虫を確認して診断しますが、被害の様子からも推測することができます。重度の場合、ニセナシサビダニでは、葉裏側に湾曲することが多くみられます。湾曲は上位葉に多くみられ、下位葉にはあまりみられません。チャノキイロアザミウマは、葉表側に湾曲することが多く、徒長枝の先端部で多くみられますが徒長枝全体が褐変することもあります。

写真6　葉が裏側に巻いている

写真7　チャノキイロアザミウマの成虫（左）と幼虫（右）

写真8　チャノキイロアザミウマの被害（葉が表側に巻いている）

5　防除時期と防除方法

（1）耕種的防除

ニセナシサビダニは、芽の基部や枝の粗皮、枝の古い切り口等、ナシ樹の様々な間隙で成虫の形で越冬するので、剪定や粗皮削り等により越冬成虫の密度を低下させます。その際、剪定枝等はほ場に放置せず、処分するようにしましょう。

（2）薬剤防除

成虫発生初期の5月上旬及び成虫増加期の6月上旬に薬剤防除を行います。徒長枝先端部を吸汁加害するので、先端部に薬剤がよくかかるように散布します。

薬剤防除を実施する場合は、

○　最終有効年月内の農薬を使用し、ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を必ず確認してください。

○　適切な薬剤を選択し、病害虫が抵抗性を獲得しないように、同一系統薬剤の連続使用を避けてください。

○　農薬を散布する際は飛散しないよう対策を講じてください。

■　発　　行　平成28年2月　埼玉県農産物安全課、一般社団法人埼玉県植物防疫協会

■　問合せ先（原稿執筆）
埼玉県農業技術研究センター生産環境・安全管理研究担当　TEL048-536-0409
埼玉県病害虫防除所　TEL048-539-0661

©埼玉県 2005

彩の国埼玉県